

竹島(独島)を 地球共生と縁結びの島に

雄大な「地球ユートピアモデル事業」構想の実現に賭ける
小松電機産業・小松昭夫社長



小松電機産業と小松昭夫社長のプロフィール

1944年島根県生まれ。島根県立松江工業高等学校。73年、小松産業設立。83年に小松電機産業(株)とする。85年、シートシャッター「門番」を開発・発表する。94年、HNS(人間・自然・科学)研究所設立。ベンチャービジネスの旗手として中小企業研究センター賞、ニュービジネス大賞、科学技術庁注目発明選定証、地域活性化貢献企業賞など数々の賞を受ける。資本金1億円。従業員85人。年商42億円。

国家から団体、企業、そして個人へと広がるボーダーレス化の時代にあつて、朝鮮半島の対岸に位置する出雲で、日韓交流に一役買っている、決して大きいわけではないが、新たな視点と具体性をもったベンチャー企業がある。この会社が「日本」と「韓国」という既存の国家概念にとらわれず、ただ利益を追求するものとしての企業、という枠をも超越して立ち上げようとしているのが「地球ユートピアモデル事業」構想。この社大なるプロジェクトを中心として、これからの日韓関係、そしてアジア・世界の共生をめざす同氏の一大チャレンジを紹介する。(編集部)

出雲発世界へ

「小松電機産業」という少々堅そうな社名をもつこの会社は、ベンチャービジネスの旗手と称される創業社長、小松昭夫氏によって、一九七三年に島根県の八雲村で小松産業として創設された。八五年には同社のヒット商品であるシートシャッター「門番」を開発し、以降上下水道の制御・監視システム「水神」を世に送り出すなど、新しいテクノロジーを応用した制御システムメーカーとして素晴らしい実績をあげている。しかし、この会社も創業当時は現金

一〇万円、五万円の中古車一台、そして工具箱がひとつ。これを元手に、ポンプの修理業からスタートした。

社長の小松氏は、田畑五反を耕す農家の出身。技術系の高校を卒業してすぐに、農業機械メーカーに就職、その会社の研究所に入り、耕耘機のトランスミッションの開発を専門に八年間勤め、その後独立。弟と二人で実家の納屋に作業場を作り、ポンプの修理から配電盤や制御盤の製作へと事業を展開していった。そこへ来た依頼のひとつが「金属ではなくシートでシャッターを作れないか」というもので、開発されたのが高速シートシャッター「門番」である。これにより同社は飛躍的な発展を遂げ、さらにビジネスを拡大し、今日に至っている。

小松社長の経営理念・哲学はとてつもなくスケールが大きい。「生命の誕生から、人類の誕生、そして人間とは何かということから長期的、多面的、根源的に考えることによつて、ものごとの本質がわかる」とし、「飢餓と殺りくのない、自然と歴史の中で生かされ、共に楽しく愉快に暮らすことのできる地球社会の創造」という目的に向かって、渾身の情熱を注ぐ。

八一年に制定された社は「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」のも

98年7月7日、韓国赤十字社にて目録の授与



を解決する糸口を見出そうとするものだ。これによって、当事国だけでなく世界の過去のしがらみに苦しむ人々にとってのモデルケースとなる可能性は大いにある。

(一) 人縁・感謝と

戦争の歴史記念館

今を生きる日本人の責任と義務において、インターナショナルプロジェクトとして、日本の国際交流の歴史を「人」に焦点を当て、歴史上の関係諸国にも協力を要請し、史実を調査する。また、過去の戦争に関しても、当事国双方の中に共通の事実認識が生まれたものから、背景・原因・経緯を共同研究し、その成果を

わかりやすく展示。日韓両国民はもとより、世界の人々およびその子孫共有の知的財産として残そうというものである。

(二) ゼロエミッション・

小規模理想郷

深刻化しつつある環境・食糧・エネルギー問題解決のため、先端技術と自然とを高次元で融合、島根・鳥取両県境の中海にEMBC工学を応用した爆発的生命連鎖海洋牧場や有機農業田園都市、海山理想住空間などを構築。自然循環のなかで文化的な社会生活が自立・存続しうることを証明し、二一世紀の新生活提案をしようというものだ。

(三) 心の首都・

松江市市街地再開発構想

人心の荒廃が著しい現代において人間本来の価値観(利己から利他へ)を育む場の創出をめざすとともに、松江市中心部に「心の首都」を建設し、「人物」の創出と「人財」養成の場を設けようというものだ。さらに、このプロジェクトに関心をもち、二一世紀を模索する人々の出会い(縁むすび)の場にしていくという。

(四) 未来を開く研究所・

教育機関

本事業を具現化するための議論・構想・調査・設計・建設・完成後の運営の各段階を通じて「実学」を学ぶことのできる研究、教育機関を開設

する。島根・松江の地域開発のための「人財」育成にとどまらず、世界に向けて「人財」を輩出するための機関を立ち上げようというものだ。

具体化・発展の可能性は

このような雄大かつ具体的な構想が成功すれば、地域活性化や、景気高揚のみならず、新たな国際交流が広がっていくことは間違いない。小松氏は、このプロジェクトを二〇〇〇年までに着手したいとしている。そのためには自分の個人財産も開発費に充てる覚悟であるともいう。それほどこのプロジェクトに自己の全てを賭けているのだ。一部地域の発展だけを考えることなく、事業や「人財」の交流を出雲から、韓国、中国、北朝鮮、ロシア沿海州はもとより、世界にまで広げることによって、相互発展していけるというのだ。豆満江開発や、金剛山観光開発といった東北アジア地域の事業とリンクさせていけば、出雲がこの地域の国際交流の中心となる可能性も大いにある。このような真の意味での国際的な視野を持った事業とプロジェクトを時代は求めている。これからの具体的な展開に向けて、小松電機産業の動きと、小松社長の手腕に期待したい。